

齋藤博著『文明のモラルとエティカ－生態としての文明とその装置』
(東海大学出版会、2006年)

中川 久嗣

わたしたちが普通「文明」という言葉を聞く時、まずイメージするのは多くの場合、エジプトのピラミッドであったり、アテネのパルティノン神殿であったり、中国の万里の長城であったり、あるいは古代のインダス文明とか巨石文明とか、そうしたものを、少なくとも世の中の一般の人々は連想するであろう。それが古い遺跡や巨大な遺物であろうと、はるか昔に滅び去った国家や社会であろうと、要するに、「文明」という言葉に容易に結びつけられるのは、「歴史的なもの」なのだ。例えば本学の文明系学科の学生が、就職活動に行った先の面接で、企業の面接担当者などに「君は、大学で文明の研究をしているのか。土でも掘ってるんですか？」などと聞かれることがあるという話は、そうした社会一般の「文明」理解の中身をよく表している一例である。文明研究イコール歴史研究・考古学研究という固定概念は、思いのほか根深いものがある。そしてそのような歴史研究的な「文明」概念は、空間的・時間的に一定の広がりを持った「テリトリアル」な歴史研究の「単位」としてとらえられるものである。この場合、「文明」の反対概念は「未開」である。

ところがその一方で、価値や理念としての「文明」概念がある。これは文明化された状態を理念的な目標として、例えば17・18世紀の西欧が掲げ、追求しようとした概念である。「文明」あるいは「文明人」とは、十分に啓蒙された進歩の状態あるいは進歩した人間（具体的には西欧社会や西欧人）を指した。例えばいわゆる「文明批評」などが論ずる場合の「文明」とは、理念的に保持される、ありうべき「文明」の状態に対して、現実の社会や人間のありさまが実はそのようなものになっておらず、解決が求められる様々な問題が生じていることを明らかにしようとする。そして同時にそうした諸問題の解決の道を模索する思索的営為が展開される。「文明」とは理念的・思想的な概念であって、この場合の対立概念は「野蛮」であるだろう。

本書『文明のモラルとエチカ』は、著者である齋藤氏が長年にわたって考究されてきた文明学の一つの到達点を示すものであるが、それは同時に、これまでともすると二つに分かれてあまり交わることのなかった、二つの「文明」概念の流れ、すなわち歴史研究的なそれと、思想的なそれを、ともに大きく包み込み総合しようとする、そのような可能性を秘めた貴重な著作である。そこに示されているのは、もちろん歴史研究の単位としての「文明」でもなく、また純粹に思弁的な理念としての「文明」でもない。著者が全面に打ち出されているのは、「装置」としての「文明」という考え方である。そこには、時間空間的な枠組みとともに、人間営為が作り出すものとしての視点、端的に言って「力」の視点が組み込まれているのである。著者によれば、人間は自然に人為的な技能という力を及ぼし、ひとつの大き

なユニットとしての「装置」を作り上げる。「文明の装置」(apparatus of civilisation)は、人間の生活世界全体を統合する。そこでは例えばシンボルや情報、あるいはさまざまな「コード」といった人間の象徴営為が展開される。物質的であるようなさまざまな構築物なども、みなそうした象徴営為とは切り離して考えることは出来ない。国家的な枠組みなどではとうてい理解できないこのような「文明装置」を分析する視点が求められるのである。

人間は主体的にこの文明装置の生成にみずから参画するとともに、しかし同時にこの装置の中で生かされている。しかも相互主体的な生(「共-他格的」)を生きる。どのような文明装置を作り上げ、その中で他者とともにどのように生き、そして生かされていくか。この問いを発する時、文明を生きるわれわれには、文明のモラルとエチカについての思惟が必要不可欠なものとなるであろう。それを欠く時、文明は「野蛮」という廢墟の場へと姿を変えるであろう。文明への思惟は、モラルとエチカへの思索なくしては成り立たないのである。

本書は大きく2部構成になっており、第1部では文明営為とそのモラルの普遍性について系譜学的な考察が展開される。そして今日われわれは文明営為においてモラルをいかに脱構築してゆくべきか、多様な視点から考察される。文明の、とりわけ現代文明のモラルは、それ自体で脱構築がつねに求められている。著者はスピノザにしたがって、モラルの学がエティカであるという。文明のモラルに対するエティカの位置は、まずもって批判的なものである。批判とは、したがって文明のモラルを問う人間的な問いにおいて、大きな役割を果たすものとなるであろう。

第2部では、今日さまざまな新しいコードを組み込んで立ち現れている現代文明のモラルについて、特にその原形象がテーマとされる。文明装置の中で生き、働き、話し考えるわれわれ人間が、いかに現代文明の装置の中で、とりわけそこで生み出される「テクノコード」といったものといかに関わるべきか。人間の身体、情動、生と文明装置の連関はどのように考えられるべきか。文明の装置の道具立てをなし稼働させている、いろいろな記号やコンピューターや画像や写真、そうしたものをいかに人間は文明と、そして文明のモラルとの連関の中で捉えていくべきか。

本書では、さまざまな思想家たちが拠りどころとされて議論がつくされている。フッサール、スピノザ、ニーチェ、ベンヤミン、ドゥルーズ、フーコー、デリダ、などなど。本書は、こうした思想家たちの思索から、現代文明で展開される多様なテクノコードの議論まで、まさしく縦横無尽に行き来しながら、しかも丁寧に読者を導いてくれる。著者は、スケールの大きな文明の考察を、こうした思想家たちの詳細な思索の成果と、実に見事に融合させることに成功している。それもまた本書の大きな魅力のひとつである。読者は、文明をめぐる著者のこうしたスリリングで知的な分析のさまに、多くを教えられ、そして同時に大きな感銘を受けるはずである。いまや文明を考える際に、単に歴史的な視点や、思想的視点のみをもってこと足れりとすることは不可能である。文明それ自体がハイブリッドな様相を呈してわれわれの眼前に現れている以上、文明学もまた複合的・越境的な知であることが求められている。モラルやエティカという古くからの人間学的な問いを、「文明の装置」という舞台の上で、新たに捉え直すことが求められているのである。本書こそは、そのような課題にまさに正面から取り組んだ労作であると言える。